



飛
初
子
小
精
話
後
編

中村俊定文庫
文庫 18
349





古亦以新語後世傳序

南極北之宮主入其也竟人相府也
妙少如露而主其切于余子切
海也年文以知子中其此語
其年其一二名不疑中其新語
徐年其一二名不疑中其新語
所以是我之寶也其寶如九日
新語不其子其先之也

陸士



香や重間波わきく落穂乃其さを良田よむを
新掃忠騎寄き、適来れとる後りあうて地証乃
ねとく後をさく地よさや白里をねほらたのるに
甘うしり人車能初周子越路のよ州よ飽く秋
満子結乃満子翅をやさめ故人梅路と頭をまへ
風盟帳さくしり喜秋城又おろく自己平
懸路一ぬ又飛ちぬ今や武の深川よ吸露養を
さくく神の鼓忠雅神を平津路凍中子をま
り路平おろしゆさく其行物をえり路子城

志くしあまを海渡天然修の報りかえりく西雲あり
向くあまを海を掃りくあまくさくく路白城く
路子あうはあはくはく屋や梅をさくあまを路をく
鳥沢鳥帽子結業もかくおむあに先おま乃良くも
ねくひくくくさくくくくくくくくくくくくく
山田ある剣神もあう今昔あき途城撰くくくあ白を
路く彼の二白結向と赤長徳之足精治き徳の梅を結
角合あんとく撰集もあくくくくく路子く風流の城
岸くく結集結あうくくくく路俗話の寄りあ集も

雅を能骨を先くまひに稱ふよの如く交を呼とくひん
や新傳子々種心南鑑了持んく路々休をを唱り
のく先東冥曾裁乃皆うも走せく千里如吹を北風
く所まふおも傳子や史路の若流伯玉如流乃く彼
く々中流流くは流くて是も謝人くは思ひくは
やい事又路子く新琴流友所く又交情帯はくくす
くく所く彼預了托まれよ生涯乃一稿の案く事
むりく此わくは流流乃く一紙如流く孫如異みくせ
直くくわくは流くくくくくくく其一行を春て二集

新書を思く新流流流とく云富平予も序せく
とくく玉里乃通り顔くくくて是書はゆれくく事
墻角の流くは流流乃くくくくくくく二紙
あく輝くぬ

南勢結く病入持之稿

南北新話拾編

吸露菴先生評語

粟舟
雲郎校合
杏洲

凡一字法と示遠波三句乃死活及の變化表れ其の
於人の説も身もあやしくお誦特話の論もあやしく
贊もあやしく及に道と南仙と一北山を指他と一文字
も示遠波も感せしめし其一條をよみしや

于鍋は身とからし吹上 梅菴

南波と一の類々善とあふ 封卜

ほがや房平 河まき 梅路

彼の善法と一ほがや房平の人のさふと名は借して
誦もあやしくの一字神妙也と一坐蒲鞞及のよ封卜
かへりて一梅路の白の路子己の句あやしくつと
我の河原をよおしし許あやしく梅路

南の善法とあふ梅路のさふ

あやしくのさふはあやしく梅路はあやしく梅路
あやしくのさふはあやしく梅路はあやしく梅路
あやしくのさふはあやしく梅路はあやしく梅路

句作のふしありてまこととて執白紙を信するの如く侍
より一句何乃尺末まなりと却て言味の源を尋ねる

清書紙く清らぶことお宝乃有 和桂

そこのおかしみの句もぬ錦木 焚萑

目々あけ大つさゆ子戦る夏ハる也 梅路

全嫌屏川流人梅たつふたのこあましくま性の
直な敷麻のま〜まあゆ〜卒^{ニカ}あ〜人せり
清く風雅を好む〜し〜彼のさ〜まきあ〜侍
満ち〜あ人か人志奇作執地をもた〜感〜

たの〜ま〜り〜ん〜或ひ〜七字紙地人ち〜侍
あま遠波を遠り〜ら〜れ〜け梅た錦木へ乃
附句とま〜感歎〜にた〜人毎すむ〜て余る城
清〜も梅路け〜侍奇妙の附句あまあ句の錦木此
句作〜ま〜り〜し〜た〜た〜た〜た〜た〜

目々あけいこれさう夏も秋くも

謙平神入る〜の〜侍人た〜路〜と〜く源交
〜あ〜む〜顧〜ま〜一句〜ち〜た〜く〜通〜わ〜わ
前句紙〜け〜紙〜ま〜も〜皆〜乃〜句作〜路〜葉〜

さきとら附のやうに起るを耳の熱して意を自ら
乃附やうなるをせうし多量なやうにせんに極世の扱
と云ふに逐句法をわたり作りく案情を三句の者お
あはれを是れも又た乃あ

三反格
真百負之申

おれこの意乃晒 香 終 季 覽

かたはれ何れ山うの意は月 蘭 小

小はれ乃意は枯うれ終 反 朱

小はれ乃りたあはれ意はとあ句法終う意は
通り一なるはれ情平一色うややうに逐句扱ふ

さきとら逐句とも又人上扱ありあはれ扱う

たれうを附の終意ともさきとらあはれ

扱うのなるはれかたはれあはれあはれあはれ

さきとらに深あはれあはれあはれあはれあはれ

是れあはれ沈漏あはれあはれあはれあはれあはれ

入はれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

のさきとら意は同とら意はあはれあはれあはれ

意はあはれあはれ

唯あはれあはれのさきとら意はあはれあはれあはれ

さきと一斗に仰をなすに物も一斗前より此ん
とをばりる存とてなうに法執向ふまをなす唯及
物重乃みまをめくあふにさるるに物をもとむる

手代書中一也乃書頭

見ぬうに其まを眼を眼鏡をよめい 梅路

体語に曰是ア眼鏡の人と海をよめい又及ぬ
書に其情をいし其乃書頭の詞をよめい
あつとも是一白書奇能知をよめい

尼と其女乃白ひり菊かへく 楚雀

庭を梨真乃むゆいひし山庭 布青

白雨り清く其暑ひちく冬を 梅路

或人けま其寫しとるに品む所い大と候ありあ
何れは清く其暑いふらよの河を又娘大とみま
あつ急めあふり書に其向せとむる人さの能唱
ともさるる存を何重とてのち人乃語論あつて是
かさうといひ心執中下路々之は一句も其法識
一字の妙を其れとて書きさるる其彼の人乃其れ
其書にさるる書さの能向ともおあえはるる

俤評く曰一字法得る品あり乃あり一四の一字
ありまんとは何れ白あり

暮乃字をたのむる月 布青

あらぬまきいふはなは 葵生

馬を於前の子に障成たるは 梅路

春能ききりきりまの叫も静なり 語苦

鶴ありにらんを明せや 示来

海を階く拙たるふききり家 梅路

俤評く曰あやの前白きくはなま馬士あり

大車能きくはなはなまきりといふ一秋方にありき
くてもやまきり日の御を羊韃とぬきありはあり
けりて秋能きを馬を角くりり乃結能きたりき
しきり後なり

俤白乃るるくはなはなまきりわたりはなまきり
て起るはなはなまきり乃大はなはなまきりありき
ありつけはなはな馬の前かきりありはなまきり
きり乃起るはなまきりはなまきりありき
情ありはなまきり

あぢりさ子ともと困事に病るる
元成

畫きしう一押さきをかたしりしや
把笛

端緬乃破きくくもき能歌也
梅路

帝師く曰是ちる人子き半里と家さるる

碧もたうらといろはわゆる
風柳

玉叶をするちやあつ乃磨く
楚雀

仙ぬくもも強くは能
梅路

我母くく神風鼓あきく時をけうれ本昔は後も

香乃於くくし茶句あきく

44 中ああきき強くは乃能
梅路

かく自くくつえ重くはい秋つしや今全壊りてひと

この強くは能くもひたきくきりく茶白紙は

きりしとわゆるし今け強くは乃踏白くわけは

茶白紙無通を法中とおあ

帝師く曰金葉乃踏白は今有るは此後支の

を給くも存の踏白は同然志く

元前句より意の重き法用ひゆく句中に意りて

一向あつて踏白紙作もそお射すれりてはそ紙也

下冷をやき掃了乃傍 楓山

燈籠と掃了乃一月能新 羽林

庭をいぬるむやれ殺生 路

壁の千くあきと曲家城まじり 素毛

店へ志志む流連者 封卜

女房の牛能孕いおひき 路

一眼の強くせ乃書形重 正以

くまーさい痛く立能夕月夜 一亩

踊りまねあふのくつわうし 路

花の香袖を比羽異乃か袖袖とも 宣考

涙のえ能日城強平 双六 村卜

転之る雪間流たよのわひうけ 路

湖のせく侍連乃新坊 一亩

親吉了世理をりも哀有きや 山叩

あま連れ中にたうー糸遠 路

衣張おか内飯粒乃極本あり 希周

志生うたるすむる越きや 示東

本後のめつき心葉折くきり 路

幸多きよき電障〜ぬ 雷 甫尹

飛石城お城へ牛々行幸〜川 和奉

魚多き身心せ千里唐之親 路

仙多きい葉紙舞ま〜も白ひあひ 和桂

この唐塚を九重乃何々 柴雀

ゆす湯の目も多き是れ子城持て 路

招敷小針もあひ〜道々を 兔承

女房に実り髪ゆふ交相乃月 梅吉

役者の名も益と〜ハきぬ 路

あはれ時の茶碗乃蓋了小さうの交 五休

りし多き栄耀小口台〜く史記 如奉

川裂たぬはぬ〜り能名〜川邊 路

小鳥の細〜うり能結鈴 兔氣

夕月も行是山城を影ま〜うり 牛話

露もも寺を初〜く〜か〜き 路

むるの海老花を走〜り〜夕〜うり 素牛

伴左抱女乃飯帳の子供ひ 市声

外料の来〜〜さ〜や〜れ〜い〜き〜い〜 路

念似堂を筋むらひ影を

希因

出河んご城おうてて是をた乳足者

芦丸

笛を島へ多味を竹刈

路

輪り本と雀了傳を筋く

楚雀

持やまけり紙息やぬ人

示来

喜結友に多志紙衣も打志き

路

陽進旅馬を海にけりもの

乙峰

くらん音も人よきとねたて

山町

夕浪を多部らきくかぬ

路

儀う多朽木計釘乃積く多

野相

拍を抱くお先取田舎者

希因

大祿馬に臨りよりけりもの

路

川と竹やと志く次虫唱

匣考

吾月子守初原つり

品兆

留取り柳も積聖化傍

路

餅搦を原抱くあき乃一通り

豆筭

かく雨をさる多中あき

南尹

あけりあぬり心匿者て止り

路

遠見ききりにかえ新御を也 和車

新水清きも洗わく月も晴 赤毛

海邊にやまたれや重くも思 路

新すれぬ固麻の風もよき 之伸

雲ふく見くまいたしゆの傾味 豆箕

華文此上にかきき乃ものかき 路

言勝り以て此を能く進 赤竹

灯火の御して疲と新ほく 瑞香

今一掃をくぬたす 路

かききく船何艘も知多し 市声

旅~~~~癖に新とあさ起 豆箕

草持た女房にわくつひり 路

神系り額もくあくや 宜中

朽と木を量りたりたきく 里朝

涼正時分を移守り 路

宇奈子に家ともあぬ豆磨賣 赤岡

床あふぬ山をおぬ月報 赤石

親者を堂乃くつと新とせ 路

揺さうめくはる夜道帆

其汀

能くもれをいほる唐の謡謡

巻紙

行く川舟のに下り舟集り

路

伽藍の善住菩薩を袖に舟を乗る

杜ト

陸子唄きた振走り川

市声

善住此間川京へ下りてはる

路

舟の子くまも唐を舟に

楚雀

陽ては夫婦の中を道ちりし

立下

夏草果花 陸舟をくまも

路

うめくはる夜道帆

希因

鳥帽子はわらわの吉吉昏

和車

あまむけい海と太本乃下坂ゆ

路

買天目了汲んふたき

糸束

うめくはる夜道帆

五葉

頼と一度平 笠能紐ゆく

路

陸舟も右鼓の波歌おし月

楚雀

今朝多雨とをる新橋

里考

暖簾乃よめぬ人やうりちい

路

芦と花とは伴物に講記

去井

南の人乃新しぬ身月と朝暮月

芦丸

高古身平志めたゆけゆけ

路

立証よきもあつて 唯りよ

二峰

のうすきき此中にさゆた

和奉

うのむける舟の健くすくす

路

因ゆ裡暢くくく唐よ東海

豆筭

飯け乃法合ふ心のちうけ合ふ

杜樂

高きくそれと年々又ま

路

洗濯のついで髪も洗ひり

之刺

江湖へ多よまたのむ本後

素竹

強右の佛乃法に敬えう聖

路

多花をそよわい山華花

大睡

神聖月子産神へ月あひり

封卜

貞女の髪は切了り及ハ娘

路

本比新法論編終

宝曆八戊寅稿九月

秋光菴藏板

江戸通油町

須原屋太兵衛

書肆

京二条寺町西へ

井筒屋庄兵衛



七知

